文化の中心と周縁 ── 文化論研究の課題

沖　田　行　司
（第14期第４研究　代表者）

儒教が文化における正統性を保持してきた前近代の日本人にとって，日本はまさしく「中華」に対する「周縁」と認識されてきた。もちろん幾度となく日本文化の正統性を主張する言説が登場してくるのであるが，「中心」と「周縁」の関係を打破するにいたらなかった。

しかし，アヘン戦争とそれに続く黒船の出現はこの関係を大きく変容させた。文化の「中心」であった中国（中華）が辺境に位置するものと認識していたイギリスをはじめ西欧列強に蹂躙されたことは，儒教という知のパラダイムの変更を迫るものであった。黒船の来航は西洋文化が持つ優越性を具体的に日本人に示した。人口に膾炙した佐久間象山の「東洋の道徳，西洋の芸術（技術）」は西洋文化を受容するロジックとして機能したが，東洋を文化の中心と位置づけるものではなかったことはいうまでもない。

明治期の文明開化は文化の中心を中国から西洋に移し変えてゆく。西洋との距離をつめる作業は，アジアとの距離を切り離してゆく作業でもあった。日本の植民地時代に建てられた，朝鮮総督府の荘厳な西洋建築が象徴しているように，日本は西洋文化を身に纏うことによってアジアを支配した。この自己矛盾を覆い隠すものとして，日本文化を「特殊」とする言説が幾たびとなく繰り返された。しかし，佐久間象山の言説と同様に，ついに文化の「中心」という自覚は生まれてこなかった。1945年以降の日本では，日本文化特殊論に対するアレルギーに増幅されて，文化の中心としての欧米がより鮮明に語られるようになった。サイードがいうオリエンタリズムが私たち日本人の自己認識と重なってくるのである。サイードは西欧文化の中で形成された視点で東洋を見つめることの問題性を厳しく断罪した。この文化の「中心」と「周縁」という固定化された関係に基づいて構築されてきた日本やアジア研究，更には日本人にとっての西洋研究などを再検討しようとするのが本研究会（第14期第４研究「トランス・カルチャー ── 越境する社会の顔と記憶 ──」）の目的の一つであった。

大城道則氏と中井義明氏の論文はそれぞれ古代エジプトと古代ギリシア・ローマを対象に，従来の日本の西洋古代研究において，あまり光が当てられなかった問題を取り上げて，

日本人の西洋古代研究を再検討しようと試みたものである。服部伸氏はドイツにおける「ホメオパティー」という伝統的な民間治療と近代医学教育が養成した職業医師との相関関係を社会史的に明らかにすることによって，日本におけるドイツ史研究の新機軸を確立しようとするものである。岡林洋氏は和辻哲郎の代表作の一つである『風土』をとりあげ，それが共産主義に対する反駁の書であるということを明らかにしながら，そこに画かれた文化類型の試みの中に脱植民主義，つまりポストコロニアルの魁を見ようとした。山田史郎氏の論文では移民社会アメリカをアイルランド系移民の文化・宗教・労働の実態を通して考察しようとしたものである。研究ノートという形で発表されているが，アメリカ文化が持つ複合性の意味を問いかけた論文である。このほか，研究会では様々な研究発表がなされたが，諸事情によりすべてを掲載するにいたらなかった。人文科学研究所の研究会を通して共有した研究成果は今後の各自の研究成果に反映されることであろう。